

観想上のマンダラと  
儀礼のためのマンダラ

森 雅秀

日本仏教学会年報  
第 57 号 拔制

# 観想上のマンダラと 儀礼のためのマンダラ

森 雅秀

(名古屋大学)

## 1. はじめに

マンダラをあつかったインド後期密教に属するサンスクリット文献に *Nispannayogāvalī* (NPY) がある。高名な学僧アバヤーカラグプタ *Abhayākaragupta* (11~12世紀) の手になり、校訂テキストがすでに半世紀近く前に出版されている (Bhattacharyya 1972)。全体は26章からなり、マンダラに関する図像学的な情報が各章に含まれている。

NPY の第1章「19尊文殊金剛マンダラ」の中に二種類のマンダラをしめす語が登場する。ひとつは「観想されるマンダラ」(*bhāvyamandala*)<sup>(1)</sup>で、もうひとつは「描かれるマンダラ」(*lekhyamandalā*) である。はじめの「観想されるマンダラ」とは、観想法や成就法とよばれる密教独自の瞑想法の中で行者が生みだした観想上のマンダラである。これに対し「描かれるマンダラ」とは、整備された地面の上に墨打ちをし、実際に顔料などによって描かれたマンダラであり、灌頂の儀式にさきだって制作される儀礼のためのマンダラである。NPY の著者アバヤーカラの意識の中には、現実の儀礼のためのマンダラと、それに対応する観想上のマンダラとの二種のマンダラが存在していた。NPY であつかっているのは、このうちの観想上のマンダラであり、もう一方の儀礼のためのマンダラは、NPY と

ならぶアバーカラの代表作 *Vajravali* (VA) の中で制作方法が解説されている。<sup>(2)</sup>

観想上のマンダラのような、いわば目にみえないマンダラと、儀礼のための実際の目にみえるマンダラという二種類のマンダラを設定する考え方はアバーカラの独創ではなく、インド密教史上、はやくから存在していたようである。二種のマンダラの萌芽はすでに『大日經』で認められる(酒井1962:179)。『大日經』に註釈をくわえた8世紀のブッダグヒヤ Buddhaguhya は、形をもたないマンダラを「自性のマンダラ」と、形象にあらわしたマンダラを「加持のマンダラ」とよび、無相・有相、出世間・世間、了義・未了義という対概念をこれにあてはめ、目にみえる加持のマンダラよりも目にみえない自性のマンダラにたいして、より高い評価を与えている(北村1980:70; 酒井1983:271-273)も参照。

アバーカラも観想上のマンダラをあつかった NPY を「すぐれた知性の持ち主」を対象にしたテキストであると VA の中で述べ(TTP, vol. 80, 83, 3, 3), 観想上のマンダラが儀礼のためのマンダラよりもすぐれていると考えていたことをうかがわせる。しかし、同じように、目にみえないマンダラであっても、アバーカラの述べる観想上のマンダラは、ブッダグヒヤのあげる自性のマンダラとはことなるものである。その最大の相違は、自性マンダラがすがたやかたちをもたないマンダラであるのに対し、観想上のマンダラが、行者の瞑想の中ではあるが明瞭なイメージ——すなわちすがたやかたち——をそなえていることである。

それではそれはいかなるイメージであったのか、そして、それは儀礼のためのマンダラのイメージとはどのような関係にあるのか。アバーカラの二著作 NPY と VA をてがかりにして、これらの点を考察してみよう。

## 2. 観想上のマンダラ

観想上のマンダラの構造については NPY の第 1 章に詳細な記述がある。

また第 2 章以下の各章の冒頭にも、簡単にではあるが、それぞれ若干の記述が含まれる。

まず、マンダラ全体の構造についての NPY 第 1 章の記述をみてみよう。<sup>(3)</sup>

地の下方のはしまで、堅牢で強固なところに、光かがやく金剛の自性の大 地と、劫末の炎のようにかがやく火炎輪をともなった境界と、地の下端から天頂にいたるまでのとても高く堅固で光かがやく金剛牆(vajraprākāra) が、望むだけの大きさをもって存在する。金剛牆の上にはとぎれることなく一体となった金剛網(vajrapañjara) がある。金剛網の上には金剛の矢(vajraśarajāla) が、下には金剛の天蓋(vajravitāna) が飾りつけられて いる(Bhattacharyya 1972: 1)。

以上がマンダラ全体の外側の部分の説明である。大地は金剛でき、そのまわりには火炎の輪がある。まわりには金剛でできた壁である金剛牆が垂直にそびえたっている。上方のはしには金剛牆が金剛牆と接してひろがり、その上下には金剛の矢と金剛の天蓋が飾られている。

つづいて NPY はその内側の記述へとすすむ。

その中にある二重蓮華(viśvapadma) と日輪の上には、右まわりに回転する黄色い十輻輪(daśāracakra) がある。(Bhattacharyya 1972: 1)

十輻輪とは、水平方向の八方と上下の二方向に合計十本の輻がある輪で、通常は守護輪(rakṣācakra) とよばれる。守護輪の十本の輻の一本一本には、東方のヤマーンタカをはじめとする十忿怒尊が乗り、その内部を護衛している(森1991c)。NPY はここで、これらの十忿怒尊の詳細な尊容を述べる。

守護輪に守られた形で、その中に法源(dharmodayā) が位置する。法源は「三角形で色は白く、きわめて大きい」と説明されている。法源とは

法 (dharma) すなわちすべての存在物の生まれ出る源であり、逆三角形という形態のもつ母胎のシンボリズムについてはすでに考察されている (Bahulkar 1979 ; 立川1986 : 75)。

法源の中には二重蓮華があり、その上には四方に鉢をのばした二重金剛杵 (viśvavajra) がある。マンダラの尊格が位置する樓閣 (kūṭāgāra)<sup>(4)</sup> は、この二重金剛杵の上にそびえている。

NPY 第一章のおわり近くに、アバヤーカラは樓閣の「まわりにあるもの」(parikara) として、金剛地などの金剛網、守護輪、法源の三つをあげている (Bhattacharyya 1972 : 4)。このうち、はじめの金剛網は火炎輪や金剛牆などを含み、マンダラ全体の外郭部を指す。アバヤーカラはさらに、これら三つの要素のうち、金剛網は NPY で説くマンダラすべてに含まれるが、のこりのふたつは観想されないマンダラもあると述べている。実際、マンダラの構造にかかわる他の章のはじめの部分を調べてみると、金剛網はつねに言及されているが、これ以外の守護輪と法源はかならずしもそうではない。守護輪を観想するのは、はじめの三つのマンダラと、20, 21, 24~26番の合計八つのマンダラに限られる。法源は 4, 12, 24番などの一部のマンダラでは観想されない。これら三つの要素の他に、地、水、火、風の四大元素、すなわち四大や、インドの宇宙論で宇宙の中心にそびえているスメール山 (Sumeru) に言及するマンダラもいくつもあり、その両者を含むマンダラも三つ数えられる (3, 14, 22番)。同じように、第1章で樓閣にいたる観想のさいごの段階であらわれた二重蓮華と二重金剛杵もつねにあらわれるとはかぎらず、九種程度のマンダラに含まれるにすぎない。つまり、観想上のマンダラでは、全体をつつむ金剛網はすべてのマンダラに共通して観想されるが、守護輪や法輪、あるいは四大やスメール、二重蓮華と二重金剛杵はマンダラによって、観想されたり観想されなかつ

たりするのである。

これらの金剛網、守護輪、法源、あるいは二重蓮華や二重金剛杵にかこまれて、マンダラの尊格を内部に含む楼閣が觀想される。ところが、NPY<sup>(4)</sup>には觀想上のマンダラの楼閣についての具体的なすがたはほとんど示されていない。これは、次章でとりあげる儀礼のためのマンダラにみられる、楼閣に関する詳細な記述とは対照的である。NPY の第1章では「そこ（二重金剛杵）には五色の宝から変化してできた楼閣がある。これは、さまざまな光につつまれ、まわりに輪をそなえた牟尼の王のマンダラである」と述べるにとどまる (Bhattacharyya 1972:2)。他のマンダラの場合も「金剛網の中央に楼閣がある」といった程度にすぎず、ここから楼閣のイメージを知ることは不可能である。

NPY のほかに、マンダラの觀想法をあつかった文献に *Sādhanamālā* (SM)<sup>(5)</sup> がある。同書の第97番「金剛ターラーの觀想法」に觀想上の楼閣についてのつぎのような偈頌がある。

四角形で四門をそなえ、八柱で飾られる。四つのヴェーディー (vedi) に囲まれ、四つのトーラナ (torana) によって飾られている (Bhattacharyya 1968: 196; 立川1986: 78)。

SM の第97番は NPY 第16章「金剛ターラー・マンダラ」と類似の内容をもった成就法であるが、NPY 第9章「マハーマーヤー・マンダラ」と関連する SM 第239番「マハーマーヤー成就法」の中にも、やはり偈文の形で

四角形で四門をそなえ、四つのトーラナで飾られる。瑠璃やアプサラスによっても飾られ、かがやく四つのヴェーディーをそなえる (Bhattacharyya 1968: 469)。

とある。

この「四角形で四つの門をそなえ」ではじまる偈頌は、後で述べるよう

に、実際に地面に描くマンダラ、すなわち儀礼のためのマンダラの楼閣の特徴を表す定型的な表現である。このように、観想上のマンダラの楼閣の形態を説明するために、儀礼のためのマンダラの楼閣を示す定型句がもちられることについては、次節で儀礼のためのマンダラの形態を紹介したうえで、あらためて考察することにしよう。

### 3. 儀礼のためのマンダラ

儀礼のために作られるマンダラの構造は、VA の中の「墨打ちの儀軌」(sūtraṇavidhi ; TTP, vol. 80, 89, 4, 5-98, 3, 2) という章から知ることができます。地面にマンダラを描くためにマンダラの輪郭線を測量し、順に内側の線をひいていく方法がこの章では述べられている。はじめに、マンダラの外周部と楼閣の外壁までの線が説明される。これらは、VA に説かれているマンダラすべてに共通する部分である。つづいて、マンダラごとに構造のことなる楼閣内部の線が解説される。ただし、最後の時輪マンダラは、外周部と楼閣の部分もそれ以外のマンダラとは構造がことなるため、これらの部分についての説明もあらためて行われる。

ここでは、はじめに述べられた、時輪マンダラを除くすべてのマンダラに共通する部分、すなわち、外周部と楼閣部の記述をもとに、儀礼のためのマンダラのすがたをさぐることにしよう。<sup>(6)</sup>

**外周部** マンダラのいちばん外側は円によって囲まれている。この円の直径を96に等分すると、マンダラ測量のための基本的な単位であるマートラ (māṭra) が得られる。<sup>(7)</sup>

マンダラの外周部は、マンダラのいちばん外側の線から内側 8 マートラ分である。すなわち、直径96マートラと80マートラのふたつの同心円によってはさまれた部分である。この 8 マートラの帶は、外側から順に、4,

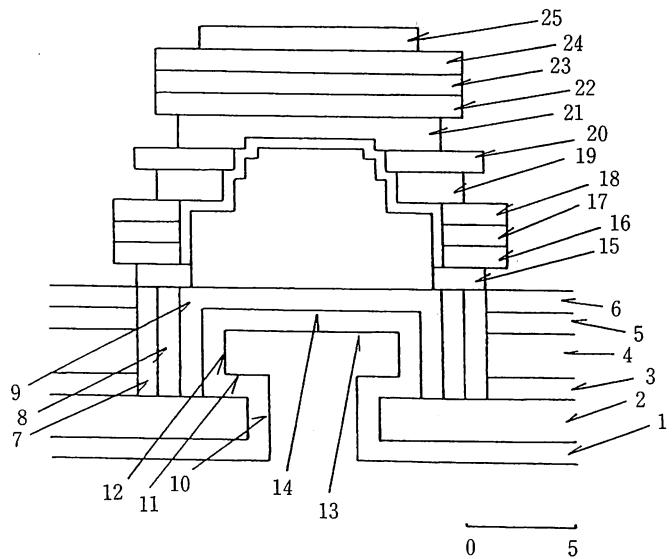
2, 2マートラずつの三つの部分に分けられる。このうち, はじめの4マートラが「光焰」(raśmi), つぎの2マートラが「金剛杵輪」(vajrāvali), さいごの2マートラが「蓮弁」(padmadala) という名称でそれよばれる。いちばん内側の直径80マートラの円を「蓮華の薬の線」(padmakeśarasūtra) と, また金剛杵輪と蓮弁のあいだの線を「法源の端の線」(dharmodayasūcakarekhā) とよぶこともある(TTP, vol. 80, 92, 3, 2, ; 92, 4, 6; 99, 2, 4 etc.)。

**楼閣部** 楼閣の形態は「四角で四門をそなえ, 四つのトーラナで飾られる」(caturaśram caturdvāram caturtoranāśobhitam) と表現されることが多い。後半の「四つのトーラナで飾られる」の部分はテキストによって若干の異同があるが, この句は『金剛頂經』や『秘密集会タントラ』などの基本的な經典にもしばしばあらわれ, 註釈書やマンダラ儀軌類でも, マンダラの樓閣の形態をあらわすための定型句となっている。VA にもこのことばは登場するが (TTP, vol. 80, 91, 4, 3), アバヤーカラはさらに樓閣についての詳しい説明を加えている。

彼によれば, 楼閣は一辺48マートラの正方形からなる。この正方形の内側の8マートラ部が樓閣の外壁にあてられる。外壁は各辺と平行の5本の線によって6区画に分割される。各区画の幅と名称は図1(1~5)のとおりである。

図1には門と門の周辺の線(7~14)も示されているが, アバヤーカラはこれに加えて, 聖者流のナーガブッディ Nāgabuddhi の説として別の形態の門もあげている(図2)。

門の部分とマンダラの外周部とのあいだにはトーラナが描かれる。VAには三つのタイプのトーラナが紹介されている。このうち, はじめのふたつは高さが12マートラで, のこりのひとつは4マートラである。<sup>(9)</sup>



	(Skt)	(Tib)	(Skt)	(Tib)
1.	rajas	tshon	15.	suvarṇa
2.	vedī	stegs bu	16.	bakūlā
3.	ratna	rin po che	17.	ratna
4.	hārārdhahāra	dra ba dra phyed	18.	khura
5.	bakūlī	rgya phubs	19.	andhakāra
6.	kramaśīrṣa	mda' yab	20.	varaṇḍa
7.	añcalā	dar dpyangs	21.	andhakāra
8.	stambha	ka ba	22.	bakūlā
9.	antarāla	bar	23.	ratna
10.	niryūha	sgo khyud	24.	khura
11.	kapola	'gram	25.	kramaśīrṣa
12.	pakṣa	logs		
13.	śilīśūcaka	gdung mtshon par byed pa		
14.	skandha	ya babs		

図1 横閣の外壁、門、トーラナ（単位はマートラ）

トーラナは三つの説のいずれの場合も水平に11の層に分割される。図1に含まれるトーラナは12マートラのはじめの説のトーラナである。11の層にはやはりそれぞれの名称が与えられている。上から数えて第五層から下の部分には内側に空白が作られ、天蓋や瓔珞半瓔珞によって飾られる。

12マートラのふたつめの説は各層の幅がはじめの説とはことなり、名称にもちがいがある（図3）。ただし、各層の水平方向の長さは第一例と同じである。第三の説である4マートラの高さのトーラナも同じように11の層にわけられるため、ひとつの層の幅がこれまでの二例に比べるといちじるしく小さくなる。名称も独自のものをもつ（図4）。第五層以下の内側に空白部分をつくることは、このふたつの説でも同様である。

**装飾品** アバヤーカラは楼閣を飾りたてる装飾品についてもVAの中でかなりの紙幅をさいている。これらの装飾品は、トーラナのまわり、外壁、楼閣の外側という順序で説明される。

トーラナのまわりには、口から宝石を吐く海獣マカラが両側にまずおかれる。トーラナのいちばん上の帯には中央に法輪が描かれ、その両側には雄鹿と雌鹿が法輪をみつめてすわっている。法輪の外側には二重金剛杵の鉢がみられる。これは楼閣の装飾ではなく、楼閣全体の下に位置する巨大な二重金剛杵の鉢の先端である。この金剛杵は鉢を四方に向いているため、その先端が法輪の輻のあいだやそのまわりに見えるのである。トーラナの装飾としては、そのほかに先端に金剛杵のついた宝の棒や、ふちかざりのついたのぼり、白い傘蓋、幢や幡、獅子や虎などの動物があげられている。

楼閣の外壁部分では、宝の帯（図1の3）、瓔珞半瓔珞の帯（図1の4）に、それぞれの名称どおりの装飾がほどこされている。このほか、特徴的な装飾としては、ヴェーディーのすみに三日月と宝と半分の金剛杵をつらねた文様が描かれる。またトーラナの柱には宝や象、獅子が描かれ、ト

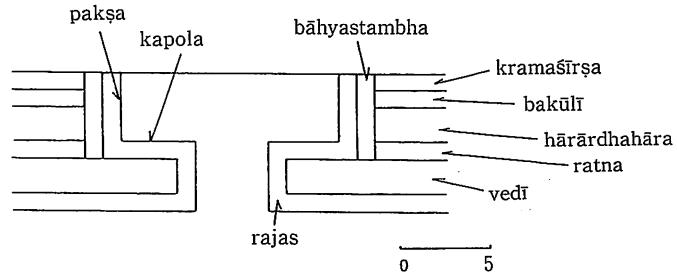


図2 ナーガブッディ所説の門

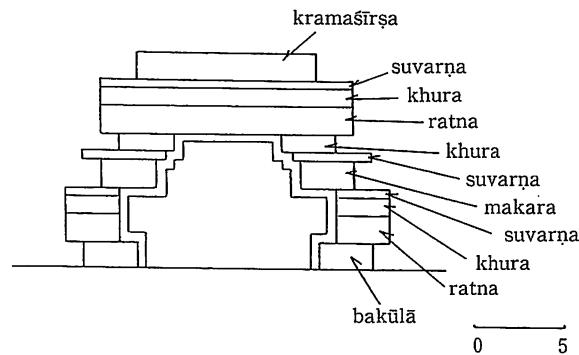


図3 トーラナ（第二説）

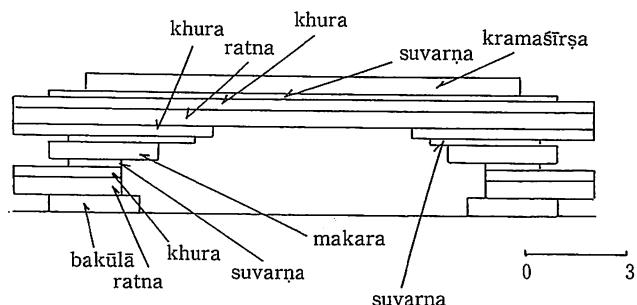


図4 トーラナ（第三説）

ラナのいちばん下の帶からは宝石がたれさがる。アンチャラの帶（図1の7）に象と獅子がおかれるという説も紹介されている。

楼閣の外側には、金の瓶あるいは宝の瓶にはいった八本ずつの幢と幡がおかれて、隅には傘蓋が描かれる。トーラナの横には賢瓶から如意樹がのび、象、馬、大臣などの七宝が如意樹に飾られる。楼閣の周囲には花輪をもつた神がみや成就者たちも描くよう VA は述べている。

#### 4. 二種のマンダラの関係

これまで、儀礼のためのマンダラと観想上のマンダラそれぞれの構造を概観してきた。つぎに、この二種類のマンダラが構造上どのように対応しているかを、やはりアバヤーカラの二著作 NPY と VA を中心に検討してみよう。ここでも、マンダラの楼閣部とその外側の部分にわけて考察する。

儀礼のためのマンダラでは、マンダラの外周部は光焰、金剛杵輪、蓮弁という、わずか三重の同心円の構造をとっているにすぎなかった。一方、観想上のマンダラでは、金剛網、守護輪、法源をはじめ、二重蓮華や二重金剛杵、スメールや四大からなる立体的で複雑な構造をとる。両者のあいだには当然、構造上の乖離があると考えられる。

しかし、アバヤーカラはこのふたつのマンダラのあいだには構造上のちがいはないという立場で話をすすめる。そのため、構造上の不一致をおぎなうための説明を何度も加えている。たとえば、儀礼のためのマンダラの外側のふたつの円、光焰と金剛杵輪を観想上のマンダラの金剛網、すなわち火炎輪をともなった金剛牆や金剛網に対応させる。ただし、アバヤーカラは VA や NPY の中で〈金剛杵輪=金剛網〉や〈火炎輪=光焰〉という単純な図式は示していない。彼は NPY の中で「鉄毘山 (cakravāda)

のはしの部分である金剛牆」と述べ、その少しあとで「鐵毘山のはしの部分である金剛杵輪」という表現をとる (Bhattacharyya 1972: 4)。鐵毘山とは、周知のようにスメール山を中心とする伝統的なコスマロジーの中で世界のもっとも外側に位置する鉄製の山脈である。彼はこの鐵毘山を媒介として、金剛網の一部である金剛牆と金剛杵輪との同一性を示すのである。

同じ趣旨の表現は VA でもみられ、「蓮弁の外側には 2 マートラ分の金剛杵輪の円があり、厚く堅固な鐵毘山のすがたをとる」とか、「金剛杵輪こそ鐵毘山であり、光焰をそなえている」と述べる (TTP, vol. 80, 92, 3, 4; 92, 5, 1)。

観想上のマンダラの内側にある守護輪については、このような面倒な方法はとらない。単に「マンダラには守護輪を描く必要はない」と断言し (Bhattacharyya 1972: 4)，儀礼のためのマンダラに守護輪が表現されない理由とする。

守護輪の中に表現される白い三角の法源についてはどうであろうか。アバヤーカラは法界の外側の線が、儀礼のマンダラでは蓮弁と金剛杵輪の間の線に対応するという見解を示している。法源の観想はすべてのマンダラにあるわけではないが、その場合、法源は法界と同一であり、マンダラは法界の中に含まれているのであるから問題はないという説を VA の中で示している (TTP, vol. 80, 92, 3, 2)。

守護輪を観想する前にあらわれる日輪と二重金剛杵、楼閣の下にある二重蓮華と二重金剛杵、あるいは特定のマンダラに登場する四大やスメールについて、アバヤーカラは儀礼のためのマンダラとの対応は特に言及していない。ただし楼閣の下に観想される二重蓮華と二重金剛杵は、外周の蓮弁と、トーラナのまわりにみられた二重金剛杵に対応するとも考えられる。

しかし、儀礼のためのマンダラでは、蓮弁と金剛杵の鉢はすべてのマンダラ

ラに共通してみられたが、観想上のマンダラの場合、特定のマンダラに含まれているにすぎない。このことは金剛網をのぞく他の構成要素についても同じことである。表現されないと明言される守護輪は別として、観想上のマンダラではマンダラごとに観想されるものがことなっていたが、儀礼のためのマンダラでは、いずれも同じ構造をそなえていた。

これまで、ふたつのマンダラは本質的には同じ構造をとっているという、アバヤーカラの見解にしたがってきましたが、この前提そのものを問題にすべきではないだろうか。すなわち、観想上のマンダラと儀礼のためのマンダラとは、マンダラの外側の部分に関してはまったく別の形態をしていたのではないか。

「観想上のマンダラの外部構造に近いものに供養法にみられる行者の結界法がある。もっとも整備された供養法のひとつである「十八道次第」を例にとってみると、つぎのような順序で結界がなされる。<sup>(10)</sup> 行者は自分のからだを甲冑で武装したあと、金剛の櫛をうち、このまわりに金剛牆をはりめぐらせる。この場に供養の対象である尊格をむかえいれた後、金剛網でおおい、さらに金剛炎で空間を結護する。

十八道の結界法は、供養法の主体である行者が自分のまわりに外にむかって順に防御壁をはりめぐらせる観想法である。これらの防御壁を逆に外側からみれば、金剛炎、金剛網、金剛牆となり、観想上のマンダラの外側の部分、すなわち、すべてのマンダラにあらわれた金剛網の構造に一致する。観想上のマンダラでは、これに防御機能をもつ守護輪や二重金剛杵、母胎のイメージである法源や二重蓮華、あるいは伝統的なコスモロジーにもとづく四大やスメールがマンダラに応じて組み合わされて、樓閣の外側の部分がかたちづくられていると考えられる。

つぎに樓閣部での二つのマンダラの対応にうつろう。観想上のマンダラ

にはすでに述べたように儀礼のマンダラで樓閣を表した定型的な表現があらわれるにすぎず、両者の対応を考察できるだけの情報がなかった。しかし、アバヤーカラは断片的にではあるが、VA の中で両者の構造のちがいにふれている。

たとえば、樓閣の外壁について「観想上のマンダラの場合、外壁の五重の壁は五種の宝石で作り、一ヤヴァ（ヤヴァは長さの単位）のあいだにおさまるといわれる。あるいは、この壁は上に順に五種の宝石で作られるともいわれる」と述べている（TTP, vol. 80, 98, 5, 7f.）。これは、観想上のマンダラでは儀礼のためのマンダラで登場した外壁の五つの層の重ねかたに水平、垂直の二説があったことを紹介したものと考えられる。また、門と壁の関係についても「外廊は儀礼のためのマンダラではアンチャラ（図1の7）までであるが、観想上のマンダラではパクシャ（図1の12）までである」と述べたり、「実際には描かないが、観想上のマンダラではシリーズ（図1の13）の上に柱が二本あると理解せよ」と指示したりする。トーラナについても「トーラナの柱は一本ずつ四角のヴェーディーの上にのっているが、ヴェーディーに接しているように見えるため、儀礼のマンダラではヴェーディーの外側に描く」という記述がある（TTP, vol. 80, 91, 4, 2f. ; 92, 3, 7ff.）。

このように、観想上の樓閣と実際に描かれる樓閣とのあいだには、微妙なちがいがあったらしい。しかし、注目すべきは、これらの例のいずれの場合にも儀礼のためのマンダラの樓閣が観想上の樓閣の基準となっており、その域を出ないことではないだろうか。たとえば、外壁の説明のように儀礼のための樓閣の五つの層を水平に観想するか垂直に観想するか定説がない。これは、儀礼のためのマンダラの樓閣が観想上のマンダラの樓閣のモデルになっていたことを示唆している。SM のマンダラ観想法において、

楼閣の部分に関しては儀礼のためのマンダラの樓閣を説明する文章がそのままあらわれたことも、このことを考慮に入れればむしろ当然といえよう。

## 5. おわりに

アバヤーカラはマンダラに関する当時の理論と実践を集めた NPY と VA を著すにあたり、儀礼のためのマンダラと観想上のマンダラというふたつのマンダラのイメージをもっていた。このうち、前者は実際に地面に描いた二次元のマンダラであり、後者は行者の観想法の中で生み出される三次元のマンダラである。

ところで、マンダラは本質的には三次元の構造をもち、実際に描かれたマンダラはこれを二次元にうつしかえたものであるとこれまでしばしばいわれてきた。実際のマンダラが成立した当初に限れば、この説明は正しいであろう。しかし、VA や NPY の記述にしたがうならば、アバヤーカラの生きた時代には両者の関係はそれほど単純ではない。

マンダラの外側の部分については、両者のあいだには、あきらかな構造上の不一致がある。これは、観想上のマンダラの外郭部が行者の結界法をモデルにしてできあがったためであろう。そして、これに、法源や守護輪、二重蓮華、二重金剛杵という、防御と母胎のイメージを組み合わせた構造をとる。その結果、実際のマンダラの外周部よりも多元的で複雑な構造となっている。

これに対し、樓閣の部分については、儀礼のためのマンダラの樓閣が観想上の樓閣のモデルになっている。これは一般的の説とは逆の関係である。平面的な樓閣を観想法では立体的な樓閣によみかえているということもできる。もちろん、もともと樓閣が平面的であったというわけではない。儀礼のためのマンダラにみられた、樓閣に飾りつけられた豪華な装飾品など

からすれば、しばしば指摘されてきたように、樓閣は宮殿をイメージしたものであろう（トゥッチ1984：70；眞鍋1969：46）。アバヤーカラの文献では、この立体的な宮殿が平面化されてできあがった樓閣を、観想上のマンダラにおいて再び三次元の樓閣に読みかえているということである。

外郭部と樓閣部では、この二種のマンダラの間で記述の軽重があった。儀礼のためのマンダラでは外郭部の説明はきわめて簡略で、その分、樓閣の構造とその装飾に記述の重点がおかれていた。これに対し、観想上のマンダラでは外郭部に多くの紙幅をさき、樓閣に対してはほとんど説明を与えていない。ここに、このふたつのマンダラでそれぞれ何が重要とみなされていたかがあらわれているのではないだろうか。すなわち、儀礼のためのマンダラでは樓閣を飾りたてることが、観想上のマンダラでは外部の構造を複雑にし堅固にすることに重点がおかれている。そして、観想上のマンダラが儀礼のためのマンダラよりもすぐれているというアバヤーカラの立場は、彼にとってのマンダラのイメージが、莊厳された宮殿から防御網を完備した空間へと移行していたことを示している。

#### 註

- (1) 二種のマンダラについては、すでに Bahulkar 氏によって指摘されている（1978）。同氏の考察は本稿の主題に関連するところも多く、きわめて有益であるが、結論は本稿とはかなり異なったものになっている。
- (2) VA については森（1991a, 1991b）参照。該当箇所は便宜上、西藏大藏經北京版（TTP）に含まれるチベット訳テキストの頁、葉、行によって示す。
- (3) Bhattacharyya による校訂本は修正すべき箇所が多数含まれている。本稿ではチベット訳テキスト（TTP, no. 3961）と、Bühnemann と立川武蔵の両氏（1991）によって写真複製された二種の写本をあわせて参照した。
- (4) 金剛牆・金剛網から樓閣にいたる、観想上のマンダラの外郭部について

は Wayman (1973: 88-97), 立川 (1986: 73-79) によっても紹介されている。結界という視点からの観想上のマンダラの構造が、眞鍋 (1969) によっても考察されている。

- (5) SM の個々の成就法の中には、かなり古い時代のものも認められるが、ここでとりあげる NPY と類似の内容をもつマンダラ観想法は、SM 全体の中でもっとも新しい層に属すると推測され、NPY の同時代の資料としてあつかうことは可能であると考えられる。
- (6) マンダラの輪郭線は田中 (1987: 112-123) に詳しい。他に George (1974: 86-87), Wayman (1973: 92-97), トウッチ (1984: 64-70) にも簡単な説明がある。
- (7) ただし VA (TTP, vol. 80, 91, 1, 2; 92, 4, 4) によれば、基本的な単位マートラは門の大きさから得られる。門の大きさ (図 1 では10の niryūha にはさまれた部分) はマハーバーガ (mahābhāga) とよばれ、この 4 分の 1 が 1 マートラである。
- (8) 堀内 (1980: 110), Matsunaga (1978: 14), Poussin (1896: 2) など。
- (9) チベットのマンダラでは12マートラを占めるはじめのふたつの説のトーラナが一般的であるが、4 マートラのトーラナもないわけではない (たとえば Rawson (1991: 90-91) 参照)。
- (10) 『無量寿如来儀軌』(大正蔵930番), 『十八契印』(大正蔵900番) などに説かれる。結界法については森 (1992) 参照。

#### 参考文献

- Bahulkar, S., 1978, 「Niṣpannayogāvalī にみられるマンダラの構造」『印度学仏教学研究』27(1): 184-185.  
—, 1979, Concept of Dharmodaya (Chos ḥbyun). *Report of the Japanese Association for Tibetan Studies* 25: 13-16.  
Bhattacharyya, B., 1968(1925), *Sādhanamālā*. Vol. 1, G. O. S., No. 26. Baroda, Oriental Institute; Vol. 2, No. 41.  
—, 1972(1949), *Niṣpannayogāvalī of Mahāpaṇḍita Abhayākaragupta*, G. O. S., No. 109. Baroda, Oriental Institute.  
Bühnemann, G. & M. Tachikawa, 1991, *Niṣpannayogāvalī, Two Sanskrit Manuscripts from Nepal*. Bibliotheca Codicum Asiaticorum 5. Tokyo, The Centre for East Asian Cultural Studies.

- George, C., 1974, *The Candamahāroṣana Tantra : Chapters I-VIII.* New Haven, American Oriental Society.
- 堀内寛仁, 1983, 『初会金剛頂經の研究』(上) 高野山密教文化研究所.
- 北村太道, 1980, 『チベット語和訳大日經略解』文政堂.
- 眞鍋俊照, 1969, 「密教図像にみえる観想上の結界について」『南都仏教』23 : 45-111.
- Matsunaga, Yukei, 1978, *The Guhyasamāja Tantra, A New Critical Edition.* Osaka, Toho Shuppan, Inc..
- 森 雅秀, 1991a, 「Abhayākaragupta のマンダラ儀軌 *Vajrāvalī*」『印度学仏教学研究』39(2) : 197-199.
- , 1991b, 「インド密教における建築儀礼—*Vajrāvalī-nāma-mandalopāyikā* 和訳 (1) —」『名古屋大学文学部研究論集』111 : 53-73.
- , 1991c, 「十忿怒尊のイメージをめぐる考察」『仏教の受容と変容 チベット・ネパール編』(立川武蔵編) 佼成出版社, pp. 293-324.
- , 1992, 「インド密教における結界法—*Vajrāvalī-nāma-mandalopāyikā* 和訳 (2) —」『名古屋大学文学部研究論集』114 : 89-109.
- Poussin, de la V., 1896, *Pañcakrama.* Gand, Universite de Gand.
- Rawson, P., 1991, *Sacred Tibet.* London, Thames and Hudson.
- 酒井真典, 1962, 『大日經の成立に関する研究』国書刊行会.
- , 1983, 「曼荼羅の基本的理解—覓密の曼荼羅法略撰—」『酒井真典著作集 第二巻』法藏館, pp. 271-292.
- 立川武蔵, 1986, 「金剛ターラーの観想法」『論叢仏教美術史』(町田甲一先生古稀記念会編) 吉川弘文館, pp. 65-97.
- 田中公明, 1987, 『曼荼羅イコノロジー』平河出版社.
- トゥッチ, G., 1984, 『マンダラの理論と実践』(ロルフ・ギープル訳) 平河出版社.
- Wayman, A., 1973, *The Buddhist Tantras : Light on Indo-Tibetan Esotericism.* New York, Samuel Weiser.